

解 答

- 【一】 ① は ② 候補 ③ 就任 ④ 障 ⑤ 肉眼
- 【二】 問一 A オ B ウ 問二 I ウ II エ
 問三 時代です。 問四 種
 問五 (一) 失敗経験 (失敗体験) (二) まずくなる必然性
 問六 創造力の欠如
 問七 失敗を隠さず、失敗から学ぶため情報を積極的に伝達していく。
 問六 ウ・カ
- 【三】 問一 イ 問二 私は絵がで 問三 ア
 問四 私はいきな 問五 エ
 問六 A エ B ア C イ D カ E ウ
 問七 木島が私の絵の続きを描きたいのではないかと思い教室を飛び出してきたのに、木島は私の絵にそれほど関心がないのだと感じたから。
 問八 ウ
 問九 「ああいうスケッチのほうが」パワーがある「から。」
 問十 イ・オ

解 説

- 【二】 出典は、畑村洋太郎『失敗学のすすめ』。
- 問一 A 文末が「……当然のことだからです。」と、理由を述べる言い方で終わっているの、「なぜなら」。B「正しいやり方」が「最短かつ効果的な方法と考えていた」という期待したプラス面と、それによって学生が身につけた知識は「表面的なものにすぎなかった」という結果としてのマイナス面をつないでいるので、逆接の「しかし」が入る。
- 問二 I 「非常に奥深い」意味を含んだ教訓ということで、「深遠」。 II 反響を呼ぶような問題をさあどうだと投げかける、という意味の慣用句が「一石を投じる」。
- 問三 文章中のどの文の言い換えになっているのか考える。「昨日までの成功」は「ほかの人の成功事例」のことで、「今日の成功を意味しません」は「自分の成功を約束するものではなくなった」ということを言い換えたものである。
- 問四 ここでの「母」は、ものごとを生み出すおもとになるもの、の意。「母なる大地」「必要は発明の母」などとも使う。「新たな創造の種となる貴重な体験」の「種」も、あることをおこすもとになるもの、の意味で、「なやみの種」「心配の種」「けんかの種」のように使う。
- 問五 (一) 「自分が新しい企画を考えるとき」のことを例にあげて、そこで「本当に欲しくなる話」は『『こうすればまずくなる』という失敗話』だと述べているので、それと同じことを意味する四字の言葉を探す。(二) 『『こうすればまずくなる』という失敗話』に続けて、『『こうやるとまずくなる』という陰の世界の知識伝達によって、「まずくなる必然性を知って」と述べられていることに着目する。
- 問六 まず、「この問題点」とはどんな問題点なのかをおさえ、次にそのことを簡潔に「六字」でまとめている表現を探す。「この問題点」が指しているのは、直前の「自分が新たにどういうものを生み出そうとするのか、肝心の課題設定さえ自分の力で行う能力が身についていない」学生が数多くいたということ。「自分で課題を設定する能力」は「創造力を身につける上でまず第一に必要な」ことなので、その能力が身についていないということは、つまり創造力が身についていない、ということで、そのことを「六字」で述べた言葉を探す。「創造力の欠如」の「欠如」は、あるべきものが欠けていることの意。
- 問七 「失敗と上手につき合っていくこと」について直接的には書かれていないが、上手につき合ってこなかったこれまでのやり方が書かれているので、それらを否定するような内容にする。「失敗から目を背けず＝失敗を忌み嫌わず＝失敗を隠さず」「失敗経験を伝える＝失敗体験を情報として積極的に伝達する」ということ、それによって「失敗から学ぶ＝成功のもとにする」というような内容がキーワードになる。
- 【三】 出典は、佐藤多佳子『黄色い目の魚』。
- 問一 「私は動けなくなった。木島の視線に射すくめられ、捕らえられてしまったように」とあるのに注意すること。「やがて、彼は鉛筆を……」の段落からエと誤答しないこと。この段落の最後の二文、「……彼の目は……私から離れることはなかった。観察されているというよりは……新たに組み立て直されているような気がした」は、木島の視線を意識していることを表している。
- 問二 「自分が描かれているんじゃない」とあるので、問一で答えた、木島の視線に圧倒されたからということ以外の、つまり選択肢のエにあげられているような木島の絵のすばらしさに惹かれている『『私』の好み』について述

べている段落を探す。「私は絵ができていくのを見るのが好き……好きな絵のそばにいたい。どうしてもなく惹きつけられる」という『私』の好み」をおさえる。

問三 いつも木島が落書きで描く似顔絵は、「独特の歪みがあって、モデルの特徴を鋭く捕らえる」のに、この日のデッサンにはそれがないので「よそゆきの感じがする」(＝自分でないような感じがする)のである。イは「私は、人間というリアルな物体だけど、髪や服の質感は見事だけど」とあるのと矛盾している。

問四 脱文の内容から、木島が教室から出ていってしまった後に入ることは明らか。文頭の「わかるのは」という言葉は、「何が起きたのかよく飲みこめなかった。」という文に対応しているので、その後に入る。

問五 「デッサンをやれって誰が言った?」「どうして、君は、いつも、そういうことばかりするの?」「これは授業なんだから、ちゃんと言った通りにしてくれないと困るんだよ」という大森先生の言葉から考える。今日の美術の授業は鉛筆だけで仕上げるデッサンではなく、スケッチに絵の具をぬって完成させるよう指示されているのに、木島は指示を守らずデッサンを描いていると大森先生は判断したのである。絵の修正についてのアドバイスは受けてないので、ウは不適切。

問七 「私」が教室を飛び出してきたのは、木島の絵がまだ未完成で「木島が続きを描きたいんじゃないかと考えていた」から。ところが、木島はもう絵のことなど「私」の絵のことなど関心がないふうで、「たいした熱意もなく聞き返した」ので、自分を必要としていたのではなかったのかとがっかりし、自分の勝手な思い込みを恥ずかしく思ったのである。

問八 「私」の顔を「観察の目つきで無遠慮にじろじろ見て」、スケッチブックの「私を描いたページを開いて眺めた。首を傾げた」とあるのに注意すること。自分の描いた絵とモデルである「私」の顔を見比べてつぶやいた言葉である。

問九 解答欄を見ると、「ああいうスケッチのほうが〜から。」という形で答えることがわかる。「いつも描いているラフなスケッチ」とは、木島が授業中に遊びで描いている似顔絵のこと。それについて「私」が「いい」と感じている理由を述べた言葉を探す。

問十 消去法で選ぶことができる。アは「幼い頃から絵画教室へ通って習った」が、ウは「いつもは優しい」が、エは「絵の具を使う気はまったくない」が、それぞれ文章中に書かれていることと合わない。